やまなし
医療最前線
令和を担う
県立中央病院から
〈190〉

婦人科・野崎敬博医師
ロボットとゲノム医療に力

子宮がんなどの婦人科疾患のロボット手術を全国トップクラスで手がけている山梨県立中央病院。婦人科の野崎敬博医師(33)は、日々の外来診療や手術を担当する一方、研究にも力を入れている。「診療でも研究でも、婦人科がんの予後を改善し、患者さんの役に立てるように取り組みたい」と話す。

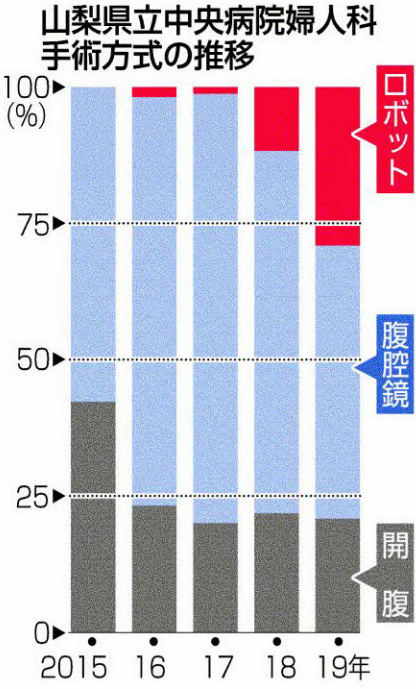
婦人科では、2014年に小さな傷口で患者負担が少なく、回復も早い腹腔鏡手術を開始。16年には、人の手より可動域が広く、繊細な動きができる手術支援ロボット「ダヴィンチ」を用いたロボット手術が始まった。15年には腹腔鏡手術の件数が従来の開腹手術を上回り、今では全体の8割を占めるまでになっている。19年には婦人科領域において「ダヴィンチ」の症例見学施設に認定され、全国から婦人科医が手術見学に訪れている。野崎医師はロボット手術の執刀助手を務める一方、婦人科腫瘍医として修練し、婦人科腫瘍専門医と内視鏡技術認定医の資格取得を目指している。

子宮頸がんは30～40代、子宮体がんは50～60代と、比較的若い世代からかかる。野崎医師は「患者さんは働き盛りだったり、子育て中だったりと背景がある方が多く、その背景を含めてケアが必要」と、接し方を含めて配慮するように心掛けている。

臨床で研さんを積むほか、週1日はゲノム解析センターで子宮がんや卵巣がんの遺伝子解析に取り組み、婦人科疾患の研究も行っている。最近は卵巣がんの診断に関して研究。卵巣がんは初期症状があまり出ず、有用な検診方法が確立されていないため早期発見が難しく、診断には手術が必要などの課題がある。そこで、血液や腹水を遺伝子解析することで円滑に診断する可能性を探っている。

千葉県浦安市出身。高校時代、闘病中の患者に対して真摯に向き合う医師の姿勢に感銘を受けて医師を志し、山梨大医学部に進学。卒業後の初期研修で各科を回る中、「産婦人科診療の特殊性や多様性に引かれた」。婦人科疾患に苦しむ患者を目の当たりにし、「この人たちの力になりたい」との思いで産婦人科に入局した。

また専門性の高い分野で診断から手術、その後の診療まで一貫して担当できることも決め手になった。「患者さんとの信頼関係を築きながら、責任を持って診たい」。日々、真摯に患者と向き合っている。＝「令和を担う」シリーズは終了します。次回は1月16日に掲載します



のざき・たかひろさん　2012年山梨大医学部卒、同大産婦人科入局。17年から山梨県立中央病院勤務。産婦人科専門医、がん治療認定医。千葉県浦安市出身。33歳。3児の父。

掲載日:2019年12月26日／ぶんくら／紙面頁014
紙面・記事・写真・イラスト等の無断掲載・転用はお断りします。Copyright 山梨日日新聞社